

# イランの発展(2)

——パーレビ政権とイスラム革命——

山 根 学

はじめに

## I パーレビ王朝下のイラン

- 1 レザ・シャーの支配
- 2 パーレビ(モハメッド)・シャー政権の確立
- 3 ホワイト革命
- 4 土地改革をめぐって
- 5 工業化
- 6 ホワイト革命の問題点

## II イラン革命

- 1 石油収入の急増・急減と経済矛盾の顕在化
- 2 イラン革命へ
- 3 イラン・イスラム革命をめぐる諸勢力
- 4 ホメイニ政権の確立——準備革命政府と原理主義者——

## III ホメイニ支配下のイラン (以下本稿)

- 1 政治的抑圧
- 2 経済的抑圧
- 3 原理主義政権下の経済発展

## IV イラン革命のディスコース

- 1 イスラムと近代化
- 2 イスラムとイラン革命

むすびに

### Ⅲ ホメイニ支配下のイラン

#### 1 政治的抑圧

ホメイニとその従者は彼等に反対する者を政治的ライバルとしては考えず、革命の前進を妨げる背教者としてとらえ、したがって彼等を宗教的な法に従って取り扱わなければならないと考えた。それゆえ国民戦線や解放運動は“イスラムの敵”，“異教徒の党”として非難されるようになり、やがて「イスラム政府の決定に対するいかなるタイプの、またいかなる口実の下での反対も、革命に対する反対として考えられ、強制的に抑圧されるであろう」というような強硬な主張が通るようになった。ホメイニ自身も79年8月には「我々は一つ、あるいは二つの政党を承認し、他を非合法的なものと言明するであろう…これはイスラムの利害である」という発表を行っている<sup>1</sup>。M. モアッデルによれば、82年の夏頃から始まった原理主義者の「恐怖そのものの統治」、すなわち反対派に対する革命警備隊やヒズボラの公然たる暴力、直接的な抑圧が強化され、イスラム共和国の“道徳性と正当性”を証明するために政治犯を拷問にかけ、数千人を死刑するという統治が展開された。なおこうした原理主義者の過激な政策は、82年以前から徐々に展開されるようになっていたので、若干時代を遡ってそれぞれの党がどのような動きをしたのかを記述しておこう。

まずシャリアトマダリが支持したムスリム人民共和党、急進党については、11人の指導者とメンバーが死刑にされ、この党を支援したタブリーズの多数の実業家も死刑にされた。シャリアトマダリはなおベラーヤテ・ファキーにたいする反対を表明したものの、党への支持をあきらめざるを

---

1 A. Rahnama & F. Nomani, *The Secular Miracle — Religion, Politics and Economic Policy in Iran*—, Zed Books Ltd., 1990, pp. 190–191.

えなかったといえよう。また彼を中心にして聖職者の主流を形成していたアヤトラ達で組織化されていたイラン・ムスリム人民イスラム共和党も、『「反イスラム的な外国の代理人」によって浸食されている党」として攻撃され、既に79年12月までにすべての活動を停止している<sup>2</sup>。

さてムジャヘディン・ハルクであるが、彼等はホメイニ政府が私的財産と搾取を存続させていること、加えて民主主義や個人の自由を抑圧していることを理由にホメイニに対して異議を唱えていたが、ヒズボラや革命警備隊との戦闘の中で原理主義者との「戦争」を宣言した。彼等はテロ活動に走り、1981年6月にイスラム共和党本部を爆破して、ベヘシテイ、ラジャイを含む多数のメンバーを暗殺したが、結局数千人もが大量に逮捕され、革命法廷における死刑の宣告の下にその力を失った<sup>3</sup>。

フェダイン・ハルクは新政権の反民主主義的な性格よりも、その反帝国主義政策を支持した。とはいえヒズボラ等との闘争の過程で政権に反対する者が現れた。多数派はホメイニの勢力を「小ブルジョア的ではあるが、革命的で、進歩的である」と評価したのに対して、少数派はそれを「反動的であり、打倒されるべきである」として闘争に入り、結局抑圧された。なお組織の分裂は、この組織が力を持っていた労働者会議、学生組織、クルド、婦人運動に破壊的な影響を与えたといわれている。

他方ツデーは新政権について、外国貿易を国有化し、帝国主義の従属性を解消しつつ、非資本主義の方向に向かっているものと解釈した。彼らはホメイニ政権を擁護する政策を遂行したため、比較的重要な官僚の地位に

2 *Ibid.*, p. 198.

3 H. Bashiriyeh, *Economic Development in Iran 1900-1970*, Oxford University Press, 1971, p. 161; M. Moaddel, *Class, Politics, and Ideology in the Iranian Revolution*, Columbia University Press, 1993, p. 215. なお武装闘争に入ったのはこの他ペイカー、フェダイン・ハルク、共産主義連合が挙げられるが、逮捕に終わっている。

4 *Ibid.*, p. 218.

つき、革命制度や軍事問題に参加することに成功している。しかしホメイニはそもそも社会主義や共産主義を拒否していたことを忘れてはならない。原理主義者の支配が安定した83年に入るとツデーの党員は逮捕され、300人以上のソビエト人はイランから追放されることになった。左翼はこの政権の「後ろ向きのプロジェクトに気づきと神権政治の危険性を認識することに失敗し、自らのエネルギーを民主主義的・社会主義的目標へ向けることに失敗した<sup>5</sup>」と評価されている。この他1980年においてはアメリカの支援の下にバクチアルの下で、また82年においては多数の高級将校の指揮の下で軍がクーデターを試みているが、いずれも制圧されていることを付け加えておこう。

原理主義者の下では一般国民もまた抑圧された。たとえば革命後4ヶ月足らずの間にテヘランだけで105もの新聞が出版され、全国レベルでみると1200もの新聞、週刊誌、月刊誌が出版された。そしてその多くは非イスラム的な色彩を持っていたといわれている。だが原理主義者を批判した新聞は、ヒズボラの攻撃対象となり、次々とニュース・スタンドから取り除かれ、左翼の本の所有者が犯罪者として扱われるようになった。1979年8月には政府によって禁止された新聞と雑誌は73を数え、結局85年までに生き残ったのは400足らずの出版物しかないというような状況が生じた。<sup>6</sup>

また1980年4月に始まった「文化革命」は、イランにおけるあらゆる国民の思想を統制したといえよう。この「革命」はまず大学において展開され、4年間大学が閉鎖されるとともに、数千人の大学教員が追放された。続いて高等学校から小学校にまで至る数万人の教員の追放が行われて、カリキュラムの改訂が強行された。彼等の申し立てによれば、これらの大学は帝国主義の大学であり、知識人達はイランの問題に対してイスラ

5 V. Moghadam, *The Left and Revolution in Iran — A Critical Analysis —*, Post-Revolutionary Iran, ed. by H. Amirahmadi & M. Parvin, Westview Press, 1988, p. 37.

6 A. Rahnema & F. Nomani, *op. cit.*, p. 176, p. 182.

ム的解決を提示できないこと、これに対してイスラム自身は「豊かな学校」であり、他のいかなるイデオロギーも移植する必要がないということであったことはいうまでもない<sup>7</sup>。こうして大学は、教員や学生がイデオロギー的に「純粹」になり、イスラムに献身的になるという「文化革命」が完了した後に再開された。

ホメイニ政権は少数民族の自治に対して非常に厳しい態度でのぞんだことも見落としてはならない。もちろんホメイニは、「イスラム共和国の中では、豊かな者と貧しい者、白い者と黒い者、スンニーとシーア、アラブと非アラブ、トルコ人とトルコ人以外の者との間に何の特権もないと国家のすべてのグループにうったえる<sup>8</sup>」と国民の平等性を唱えてはいる。しかし現実にはシャーが追放され、たとえばクルド人が多いクルジスタンや西アゼルバイジャン等で革命委員会が設立され、既存のクルド民主党の他にクマラ党(毛沢東主義者)達が土地なし農民を扇動して、シャーの時代にあまり土地改革が行われなかったこれらの地域で改革を求めて暴動を起こし、それが実現されない状況の中でやがて民族の自治を求めるようになると、革命警備隊は、地主に革命委員会を組織化させ、彼等に武器を配り、軍隊を派遣することによってこれを抑えた<sup>9</sup>。イラン東部におけるトルクメンの自治を求める動きやホラムシャハル、アフワーズ、アバダンにおけるアラブ少数派の動きに対しても革命警備隊が、同じような過酷な抑圧的対応をとったことが報告されている<sup>10</sup>。

7 M. Kadhim, *The Political Economy of Revolutionary Iran*, The American University in Cairo, 1983, p. 53; 桜井啓子「イラン・イスラム共和国のイデオロギー」『アジア経済』, 第28巻第3号, 1987年は小学校の教科書の内容がイスラム化されていく状況が記されている。

8 The Ministry of National Guidance, Hamdami Foundation, *Selected Messages and Speeches of Imam Khomeini*, no date, p. 8.

9 J. D. Stempel, *Inside the Iranian Revolution*, Indiana University Press, 1981, p. 209; H. Bashiriyeh, *op. cit.*, pp. 147-148.

10 J. D. Stempel, *op. cit.*, pp. 209-210.

こうして1983年の中頃までに「アヤトラ・ホメイニの従者達は一つの目的、すなわち至上の宗教指導者(達)が究極の権力の地位を支配するイスラム政府の建設を遂行した<sup>11</sup>」。それと同時に「反シャー、民主主義、反帝国主義の熱望をもって始まった革命は、そのために戦い、勝利をもたらしたまさにその人々に反対するもの<sup>12</sup>に変わってしまった」といわれている。

## 2 経済的抑圧

### a 土地改革をめぐる

さて革命の過程で多くの革命委員会が設立されたことを指摘したが、農村では土地の私所権の廃止や銀行や協同組合にたいする農民の負債の帳消し、あるいは地代や税の廃止を求める運動が展開し、農業労働者は農業会社やアグリビジネスの解体を求めた。しかし革命委員会は、草の根的な農民によって設立されただけでなく、シャーの時代の土地改革によって失った土地を取り戻そうとした地主によっても、またクルジスタンの土地改革要求でふれたように原理主義者によっても設立された。しかし原理主義者が土地改革そのものを支持したわけではなかったことを見落としてはならない。

ホメイニはシャーの土地改革に対して、それが「『アメリカの市場を作るために』制定されたこと、『すべての耕作形態の完全な崩壊に終わった』こと、『我々の必需品を外部の世界に』依存させるように変えたこと<sup>13</sup>」等の理由を挙げて土地改革を批判し、多数の国营農業会社を解体し、その資産を株主である農民に返そうとした。だが一方で彼は「我々はいかなる非

11 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 224.

12 A. Rahnema & F. Nomani, *op. cit.*, p. 18.

13 *Ibid.*, p. 236.

イスラム的な土地の再配分に反対する<sup>14</sup>」とのべて、農民の土地要求に歯止めをかけており、このラインに沿って最高の権限を持つ革命会議は勝手に土地を接収した者は革命法廷に告訴され、死刑を宣告されるという決議を行っている。したがって土地改革が叫ばれ、農村会議が設立されたトルクマン・シャーでも、クルジスタンと同じように軍と革命警備隊によって草の根的な農村会議は解体され、その指導者は逮捕された。<sup>15</sup>

もっともその後政府も国民の不満を気にするようになり、アヤトラ・バハナル (革命会議メンバー) 等は、「この国の農業問題を解決する我々の政策は、それを耕している者に土地を与えるように方向づけられている<sup>16</sup>」とのべているし、政府もまた未耕地や国有地の再配分を盛り込んだ土地改革法案を作成し、更にその修正法案においては土地所有の最高限度を農民が生活を維持できる規模の3倍に規定するというように農民の利害に関心を払っている。しかし重要なことは、こうした土地改革は常にイスラムの中に位置づけられて考えられ、しかもどのようなものがイスラム的土地改革であるのかについて、聖職者の多様な派閥の間で対立がみられたことであろう。たとえばアヤトラ・ルハニは、土地改革法案は「イスラム法に反している」と論じ、土地改革手段は「耕地の衰退」を導くと論じた。<sup>17</sup> もちろんこの議論の過程で土地所有者は、土地改革に反対するか、自ら都合のよい「改革」プログラムを提示して実質的な改革を妨げることに熱心になったことはいうまでもなかった。<sup>18</sup> 結局のところ土地改革法案は、憲法擁護委員会の反対に合い、83年の議会で宗教的寄進地ワクフを占拠していた農民の排除が決議され、聖職者の利害が満たされた他は、85年時点でも決

14 M. Parvin & M. Taghavi, *A Comparison of Land Tenure in Iran under Monarchy and under the Islamic Republic*, Post Revolutionary Iran, p. 174.

15 *Ibid.*, p. 174.

16 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 229.

17 *Ibid.*, p. 246.

18 *Ibid.*, p. 246.

定されなかった。86年になってやっとイスラム議会は、一時的に貸与されていた80～85万ヘクタールの土地を農民に分与し、90年に約125万ヘクタールの未耕地、農地等を22万家族に分配したことが記されている。<sup>19</sup>

#### b 工業化をめぐる

農民の土地改革要求と同じようにイスラム革命の展開はイラン労働者の意識を高めた。たとえば初期にはタブリーズのトラクター工場では、労働者は経営者を追い出し、自らシュラと呼ばれる工業委員会を設立したり、鉄道分野では3万5000人の労働者が鉄道労働者会議を設立したことが報告されている。こうした状態が生じたのは、工場の経営者や所有者が革命を恐れて逃亡した状態の下で労働者が自ら工場の運営を引き受けざるをえなかったことによる他、労働者の意識の高揚が大きく作用していたことを見落としてはならない。これらの労働者会議は工場を運営するとともに、週40時間の労働や賃金の引き上げ、利益の分配、ストライキの合法化、失業基金の創設を求めた。イスファハンの1万人に及ぶ失業者は雇用、パン、住宅を求めてデモ行進を行ったといわれている。

しかしブルジョア的性格を持つ準備革命政府が、これらの労働者会議を統制し、それらを経営者会議に置き換える努力を行ったのはいうまでもないが、イスラム共和党も「下からの権力機関としてのシュラは非イスラム的である」と考え、これまでの自発的なシュラに対抗するものとしてイスラム協会とイスラム的シュラの設立に努めた。彼らは労働者に対して「経営者との協力、善意に基づく紛争の解決、生産性の上昇、個人のイニシアティブの利用」などを唱えるとともに、80年にはシュラの設定については内閣の承認を得ること、「ストライキ委員会やシュラが“経営や職務の任命問題”に干渉することを禁止する<sup>20</sup>」特別強制法を導入した。81年に

19 J. Amuzegar, *Iran's Economy under the Islamic Republic*, I. B. Tauris & Co. Ltd., 1993, p. 183.



なると新しいシュラの設立は禁止され、労働相のタバッコリは「イスラムの労働法は経営者と個々の労働者の間で行われる契約の自由に基づいてい<sup>21</sup>る」と論じた。こうした発言に対して労働者の反対運動の高まりと労働相の解任が見られたものの、リベラルな経営を行おうとした者達の排除が行われ、多数のシュラの活動家が逮捕されて、死刑に処された。他方で工場の軍事化が推し進められ、ストライキや賃金引き上げに対する攻撃を強化し、たとえば革命警備隊がシュラが支配する工場へ原料などを供給することを妨げ、工場を閉鎖に追い込むというようなケースさえみられた。<sup>22</sup>労働運動は抑えられ、79～80年には366を数えたストライキの数は、80～81年には180、81～82年には89へと急減せざるをえなかつた。<sup>23</sup>

なおイスラム政権の下では商業と手工業は労働法の範囲外で操業することが許されることになり、経営者は労働時間や最低賃金、児童労働、その他の労働法を無視することができることになった。工場は不信心な者に対する防壁と考えられるようになり、イスラム協会は「労働者にとっては新しい SAVAK と見られる<sup>24</sup>」ようになったことを付け加えておこう。

### c. 国有化をめぐる

ところで工業や銀行、保険会社に関しては、その所有者が以前の政権との関わりを通して非合法に富を得ていたことと、既述のようにその所有者が逃亡して経営や財政が危機に瀕していたこと、また銀行の場合利子を課すことはイスラムで認められなかつたこと等を理由として国有化された。1982年までに国有化された大規模な資本家の資産は230以上にも及んでおり、それは全民間資本の80%にも達した。<sup>25</sup>

20 A. Bayat, *Workers and Revolution in Iran — A Third World Experience of Worker Control*, Zed Book Ltd., 1987, p. 113, p. 119, p. 156.

21 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 236.

22 H. Bashiriyeh, *op. cit.*, p. 144; A. Bayat, *op. cit.*, pp. 156–157.

23 *Ibid.*, p. 107.

24 *Ibid.*, p. 189.

だが国有化はきわめて限定されたものであり、多数の小資本家の活動を許容するものであったことの方を重視する必要がある。たとえば銀行は国有化されることが規定されたが、他方イスラムに基づく慈善的な機関としての無利子貸付基金については、この国有化が除外されたため、革命前には約200を数えたにすぎなかったこの基金は、革命後にその数を3000にも増加させている。<sup>26</sup> 国有化を免れた彼ら多数の私的金融機関は、バザールの高所得者から預金を受け、国家によって統制された銀行システムの枠外で実質的に高利を課す私的銀行として活動した他、国内商業、貿易、ブローカー活動、サービス業等で高利益をあげたというのが現実の姿である。彼らは「巨大な資金を非生産的なサービスにつき込み、そのため物価を安定させ、生産セクターを開発するための通貨を調達しようとした政府の足を引っばった」と批判されている。<sup>27</sup>

商人達は国有化の危機が迫ると、その合法性を問題にするためにイスラム法を利用し、政府を脅かした。たとえば貿易の国有化については、彼らはそれが小企業家や小売り商人を破壊し、結果として500万人の失業者を生み出すであろうと主張した。だがその一方で彼らはイスラム共和党の役人、たとえば商業大臣 H. アスガル・オウラディに取り入り、輸入品や地方の製品の販売を独占し、自由市場で大きな利益を得た。また政府が消費生活協同組合の拡充と強化を図ると、彼らは「大資本家のための連合組織」といわれた配給協同組合を組織化してこれに対抗している。いずれにしても商人たちのこうした活動をイスラム政府が許可していたことは、政府の関心が彼ら原理主義者が掲げた“収奪された者”の利害を反映することに向けられていたのではなかったことを示すものであると考えてよいで

25 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 233.

26 H. Amirahmadi, *Revolution and Economic Transition —The Iranian Experience—*, State University of New York Press, 1990, p. 141.

27 *Ibid.*, p. 142.

あろう。

こうして何度もいうようにイスラム革命は、反革命の勝利を導いたという結論が引き出されることになる。ただ注意しなければならないことは、イランにおいては搾取している階級と搾取されている階級は、共に重大な組織的欠陥を持っていたことである。たとえば1977年においては31万5143人の労働力を持った16万3819の小規模工業が都市に存在しており、このうちの10万3422人、すなわち33%は給与を受けていたが、残り67%はその所有者と家族によって経営されていた。つまり約21万人は小ブルジョアの財産所有者として分類され、この小さな企業規模が「組織化された労働者の運動の発展を妨げた重要な要素<sup>28</sup>」となった。その後の82年の統計では7531の大規模工業が操業し、42万6000人のブルーカラー労働者と6万人のホワイトカラー労働者が雇用されていたが、かれらは労働組合の経験を欠いており、その活動家の間にも見解の一致があったわけではないといわれている。また農民の集団もばらばらなものに留まった。

財産所有者の方も十分な組織化ができていたわけではなかった。たとえば大ブルジョアジーはわずかしかみられず、シャーとともに国外へ逃亡した。土地所有者も土地改革に反対できる全国的なネットワークを持っていなかった。彼等はテヘランで2度全体会議を開きはしたが、準備革命政府の崩壊をもって政治面での重要な同盟者を失った。

唯一シャーの時代に迫害されていたバザールの小ブルジョアジーのみが大きな勢力を形成していたといえよう。彼らは70年代末にはバザール・商人・ギルド組合、ギルド問題委員会、商人統一ギルドなどを形成し、リベラル派やイスラム共和党、ムジャヘディン・ハルク等様々な勢力と結びついた。モアッデルによれば「バザールにおけるこれらの多様な政治的傾

28 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 239.

向の存在は、集団的な活動のための能力を隠しており<sup>29</sup>、どの政治勢力が倒れてもどれかが生き残るようなシステムになっていたことに注意しなければならない。実際「バザールの力はイスラム共和国の中で現れ、政治的、経済的にもきわめて強くなった。(特に) ウラマーとの同盟は、——革命の間のかれらの支持のみならず、かれらのイスラムの価値観や方向性の故に——バザールの商人に政府内での発言力を与えた<sup>30</sup>」。

だがこの小ブルジョアジーが経済面で力を握っていったのは、「イスラム的ディスコース (論理展開) に既に組み込まれていた財産所有者階級にとって有利なバイアスの故に成功した<sup>31</sup>」のであって、その成功はイスラムの理念と切り離しては理解できないことを見落としてはならない。イスラム原理主義と「シーアの革命的ディスコースの原動力によって動かされたこの国における“イスラム化”が、パーレビの下で被害を受けたバザールの伝統的組織の再建と復活を促した<sup>32</sup>」ともいえよう。

#### d イスラムの経済理論

では原理主義者が唱えたイスラムの経済理念とはどのようなものであったのであろうか。J. アムゼガルによれば、「イスラム経済においては私的所有権は人間の労働から生じる」ものとされている。天然資源は国家に属するが、「合法的に獲得された私的財産は尊重される」(憲法第47条)とあり、それは「イスラム法の限界を超えて進んではならない」(44条)こと、この国の経済的成長と発展に貢献すること、社会に害を与えてはならないことが条件として挙げられ、この条件を満たす限り富の蓄積は禁止されていない。むしろ「自己利益、野心、物的刺激は必要で、建設的である

29 *Ibid.*, p. 243.

30 M. E. Bonine, *Shops and Shopkeepers —Dynamics of an Iranian Provincial Bazaar—*, Modern Iran —The Dialectics of Continuity and Change—, ed. by M. E. Bonine & N. R. Keddie, State University of New York Press, 1981, p. 237.

31 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 246.

32 *Ibid.*, p. 246.

と認められている」。つまり民間企業の活動は「健全で、人間的で、自己犠牲的で、社会正義を持っているイスラミ的な基準に一致しなければならない<sup>33</sup>」ということであろう。

イスラムのこうした考え方の基礎には、富は神によって所有されているものであり、人によって所有されるものではない、人は富の一時的な受託者であり、管理人にすぎないという思想がある。「経済活動は神の目的に対する手段と考えられ、それは最終的にはシャリーア、宗教法に記されているように、神の栄光が個人的、社会的行動の規範に厳格に一致するように示される以外のものではなかった<sup>34</sup>」。だがイスラムという歯止めが富の蓄積・集中にかけられているとはいえ、「要するに主流のイスラム経済学は、市場メカニズムと資本主義的生産関係に一致した経済的枠組みを提示している。生産は利益のためである。労働者は賃金を見返りに雇用される。市場メカニズムは価格と賃金を定める。それらは『最適で』、『正当な』資源の配分を反映する<sup>35</sup>」等々という原則がイスラム経済の中に厳然として見いだされるわけであり、そのため「資本主義の一形態としてのイスラム資本主義<sup>36</sup>」とラハネマとノマニによって評価されているのはもったもなことであるように思われる。

ところでイラン・イスラム社会における経済発展にかんしては、憲法第4条で「外国の支配から独立する」ことが謳われて、経済の自給自足が目標として掲げられた。第44条では経済主体は3つのセクターに分けられ、国家セクターにはすべての大規模で、基本的な工業、貿易、鉱物資源、鉄道、通信などが含まれた。共同組合セクターは「イスラムの基準に

33 J. Amuzegar, *op. cit.*, pp. 19-20, p. 28.

34 M Kadhim, *op. cit.*, p. 48.

35 S. Behdad, *The Political Economy of Islamic Planning in Iran, Post-Revolutionary Iran*, p. 110.

36 A. Rahnama & F. Nomani, *op. cit.*, p. 159.

従って生産と分配に従事する共同組合」と規定され、民間セクターには農業、工業、貿易、サービス業等の広範囲な分野が割り当てられた。<sup>37</sup>これらの経済分野の役割分担や相互作用については、イランの中で未だ十分に議論されていないが、既述のイスラム経済にかんする考え方と併せて考えれば、「理想的な市場志向型イスラム経済とは、主として自給自足で、外部の世界がもつ価値や思想、生産関係、テクノロジーに対して最小限の接触しかもたない農業志向の小規模商品生産に基礎づけられる<sup>38</sup>」もの、というホメイニの考えに合致すると考えられよう。

### 3 原理主義政権下の経済発展

#### a 経済政策

革命の高揚と1年以上に及ぶ政治的混乱、ストライキ、サボタージュ、物的な破壊は、この国の経済を混乱に陥れた。石油の生産と輸出は、アメリカ大使館員の人質事件を契機として西側諸国が行った経済制裁（金融、貿易、技術に及ぶ）とその後の石油価格の下落の中で急減し、政府の収入は減少した。企業の経営者や所有者はイランから逃げ出し、銀行に蓄積されていた資金は没収の恐怖から海外へ逃避していった。しかも原理主義者はイスラム経済を実現するという口実の下に、企業における熟練労働者を追放し、強硬派ではあるが全くの素人をその地位に据えた。更に1980年9月に始まったイラクとの戦争がイラン経済に大きな負担を課したことはいうまでもなかった。

イスラム政権は、輸入数量制限、基本的な必需品の配給と種々の補助金給付、12にも及ぶ外国為替レートの設定とその配分、賃金・価格の統制等をおこなったが、結局その経済政策は「年々“どうにか切り抜ける”と

37 J. Amuzegar, *op. cit.*, pp. 27-28.

38 A. Rahnema & F. Nomani, *op. cit.*, p. 236.

いう戦略<sup>39</sup>」でしかなかったといえよう。もっともバザルガン政権の下では「階級なき社会」に向けての計画が唱えられ、またイスラム政権下の81年にも新計画が立案された。しかし後者の計画では、20年間にイランのGDPを4倍に引き上げること、9%の成長率を達成すること、農業を10年以内に自給自足の状態にすること、必要とされる機械やパーツ、資材等を自給できるようにすること、GDPに占める石油の比重を30%から10%へ引き下げることが提案されており、およそ実現されることができないような内容になっていたことに注意しなければならない。<sup>40</sup>

#### b 経済の停滞

さて現実のイランの経済発展は次の通りである。農業生産量は革命後の14年間に年平均4.7%の率で増加したともいわれているが、<sup>41</sup>その実体は第10表の通りである。表をみれば、1976年までの成長とその後の停滞の方が目につく。農業における停滞は、戦争によって農業へ配分する資金が不足し、たとえば肥料使用量は増加したものの、水資源への投資がほとんど行われなかったこと、戦争のため若い労働力が引き抜かれたこと、依然として農村から都市への移民が絶えなかったこと、更には食料作物の価格を低く抑えるという政策によって農民が生産意欲を失ったこと等によるものと説明されている。<sup>42</sup>他方農産物、特に食料に対する需要は人口増加(年3.5%)や食料補助金等によって急速に増加し、その輸入は増大し続けた。

工業分野ではその生産は、革命の最初の2年間で年平均12.5%もの低下を示した。その後生産は増加に転じたものの、これまで輸入されていた資本財、原材料の不足のために十分な経営が行えず、イラクとの停戦時ま

39 J. Amuzegar, *op. cit.*, p. 46.

40 *Ibid.*, pp. 126-127.

41 *Ibid.*, p. 54.

42 *Ibid.*, pp. 190-191; K. Mofid, *The Economic Consequences of the Gulf War*, Routledge, 1990, pp. 30-34.

第10表 主要農産物の生産量 (1000トン)

品目	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985
小麦	4,600	4,700	5,570	6,044	5,517	5,526	5,800	5,700	6,518	6,500	5,956	5,500	6,000
米	1,334	1,313	1,430	1,566	1,400	1,280	1,420	1,212	1,500	1,400	1,216	1,600	1,100
大麦	923	863	1,438	1,487	1,230	1,276	1,000	1,100	1,351	1,400	1,413	1,550	1,650
コーン	25	25	65	80	55	60	57	60	50	53	55	50	50
砂糖ビート	4,940	4,200	4,670	5,250	4,150	3,653	3,900	1,500	2,318	2,100	3,650	3,290	3,380
砂糖きび	1,050	1,200	940	600	1,000	898	1,399	1,400	1,400	1,300	1,600	2,200	2,150
綿花	615	715	470	510	535	472	278	180	211	294	202	226	200
牛肉	99	102	104	108	160	160	161	171	181	190	165	165	168
マトン・ラム	158	152	167	171	176	224	230	232	225	225	230	234	234
家禽	100	103	106	130	189	208	211	211	213	215	230	235	240
牛乳	1,050	1,150	1,230	1,250	1,300	1,580	1,580	1,550	1,627	1,705	1,650	1,650	1,700
羊乳	555	570	593	617	640	664	687	690	710	731	705	705	715
チーズ	77	81	85	86	89	98	98	99	102	105	104	104	106
バター	48	51	54	56	58	66	66	67	69	72	70	70	71

資料 K. Mofid, *The Economic Consequences of the Gulf War*, Routledge, 1990, p. 28.

で「政府の監視下にあった企業の生産はその能力のたった30%という記録的な低さで操業をしていた」と報告されている。<sup>43</sup>たとえばそれは非石油分野における工業のシェアが27%から21%へ低下し、雇用も77年から87年までに9%も減少したことから明らかであろう。こうしてイスラーム政権下で労働生産性は全体として30%低下し、農業・工業生産は停滞・減少し、「革命以来経済成長はほとんどなかった」といわれるような状態がみられることになった。

イラン経済において重要な位置を占めている石油生産も革命後大きな影

43 J. Amuzegar, *op. cit.*, pp. 55-56.

44 *Ibid.*, p. 59.



第 11 表 イランの総輸出額

(10 億リアル)

	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
総輸出額	426	1,459	1,367	1,652	1,713	1,558	1,408	944	981	1,632	1,685	1,128	1,219	840 <sup>(1)</sup>
石油輸出額	387	1,414	1,328	1,610	1,667	1,528	1,352	938	944	1,608	1,660	1,103	1,194	810
原油輸出額	365	1,336	1,245	1,539	1,539	1,470	1,228	684	731	1,508	1,621	1,066	1,157	790
石油以外の輸出額	39	45	39	42	46	30	56	56	37	24	25	25	25	30 <sup>(1)</sup>
総輸出に占める石油%	90.8	96.9	97.1	97.5	97.3	98.1	96.0	94.4	96.2	98.5	98.5	97.8	97.9	96.4
総輸出に占める原油%	85.7	91.6	91.1	93.2	89.8	94.4	87.2	68.8	74.5	92.4	96.2	94.5	94.9	94.0
総輸出に占める石油以外%	9.2	3.1	2.9	2.5	2.7	1.9	4.0	5.6	3.8	1.5	1.5	2.2	2.1	3.6

注 (1) 見積り

資料 *Ibid.*, p. 19.

響を受けた。イラン政府は、シャーの時代に貴重な石油資源があまりにも急速に減少し、軍備や壮大なプロジェクトに浪費されたことを批判して、79年には石油販売に関するコンソーシアムとの協定を一方的に破棄し、減産政策に着手した。こうして78年には日産570万バレルを誇ったイランの石油生産は、79年1月には日産70万バレルへと減少し、OPECにおけるそのシェアは17%から6%<sup>45</sup>へ低下している。しかし上記のような石油備蓄戦略は短命に終わらざるをえない運命を持っていた。というのは革命後の工業を中心とした生産能力の劇的な低下、赤字財政の増大、外貨準備の急減が政策転換を迫ったからである。以後イランは石油生産を増大させたが(第11表参照)、84年の輸出減少にみられるように世界不況の中でそれは逆に石油価格の崩壊となってこの国を一層窮地に陥れた。

そしてイラクとの戦争はこの国の経済に一層の大きな負担を課したといえよう。約30万人が死傷し、250万人が住居を失い、52の都市が被害を

45 *Ibid.*, p. 231, p. 234.

受け、この国の経済にとって最も重要なアバダンの石油施設は破壊された。戦争によるこうした直接の被害に加えて、軍事支出、シリアの支持を得るために送られた無料の石油や、イラン自身が不足に陥って輸入しなければならなくなった石油の代金、必需品の輸入ルート変更のために要した費用等、総額 6443 億ドル、つまりこの国の GNP の 60% に達するものが戦争によって失われたと見積もられている。<sup>46</sup>

失業とインフレも悪化した。失業率は 70 年代末の 10% から 84 年の 18.7%、86 年の 14.1% へと上昇し、非公式の統計では 86 年のそれは 28.6% と評価されている。加えてかなりの不完全失業者が存在したこと、多数の若者が徴兵されていたことを考えると総就業人口のたった 61% が現実<sup>47</sup>に生産に従事しているにすぎないといわれた。イラン国民の一人当たり実質所得は、1977 年の 292 リアルから 88 年の 151 リアルへと 48.3% も減少した。88 年においてはこの国の人口の約 65% は貧困ライン以下で生活していたともいわれている。<sup>48</sup>

しかし同時に既述のイスラムの経済理念に基づいてバザールの商人たちが国内の商業や貿易、あるいは配給制度への介入を通して多額の利益をあげていたことを見落としてはならない。彼等は革命直後から国際資本が排除され、大ブルジョアジーが国外逃亡した後に残された空白を満たし、急速にその勢力を拡大していった。たとえば 86 年においては 5000 人ものバザールの商人達が、課税後においてもなお 500 億リアルもの利益をあげていたといわれ、日刊紙リサレトによれば億万長者の数は革命前のおよそ 100 家族から革命後には 900 家族へ増加したことが指摘されている。<sup>49</sup> 革命後のイランは豊かな者と貧しい者という二つの階級へますます 2 極分化す

46 K. Mofid, *op. cit.*, p. 121-125, p. 135.

47 H. Amirahmadi, *op. cit.*, pp. 187-188.

48 *Ibid.*, p. 138; J. Amuzegar, *op. cit.*, p. 380.

49 H. Amirahmadi, *op. cit.*, p. 140, p. 201.

ることになった。

こうした傾向は、1988年におけるイラクとの停戦とアヤトラ・ホメイニの死後一層明確な形を取るようになったといえよう。特にホメイニの死後、それはイスラムのヒエラルキーの中で二つの派閥の論争となって現れた。原理主義者は依然としてイスラムの精神性を強調し、自給自足、輸入代替、国有化、外国資本の排除を主張したが、保守派とプラグマチックな立場に立った派閥は、インフレや失業、都市の大衆の間に増大している不満を考慮して、政府が革命や戦争を口実にして人々に一層の犠牲を求めることができないと判断した。彼等は経済発展のために豊かな商人、聖職者の主流、地主等の支持を得て、貿易の自由化や事業にたいする規制の緩和、門戸開放等という市場経済の復活を望んだ。<sup>50</sup>

こうして89年からイランの経済政策はアヤトラ・ハメネイの下で非イデオロギー的になり、よりプラグマティックになった。新しい5カ年計画(89~93年)では、戦争で被害を受けた住宅、農業の復興、完全雇用の他に急速な工業化に重点が置かれ、90年からはかなりの規制緩和が実施されて、自由化が展開されることになった。重要ではないと見なされた商品は価格統制からはずされ、民間資本家には戦略的なもの以外のすべての工業分野における活動が許可された。しかも政府は国有化されている数百の大規模な企業を民営化する意図があることを宣言し、海外に逃避していた資本家はイランに帰還して、かつて接収された財産の返還を要求するよう奨励された。また外国資本を誘致するためにフリーゾーンが設けられ、元本や利益の本国送金の自由が保障された。<sup>51</sup>

もちろん大統領は新しい政策が西欧のモデルに従ったものではないことを強調し、「混合的イスラム経済」であると弁護しているが、結局のとは

50 *Ibid.*, pp. 118-123; J. Amuzegar, *op. cit.*, pp. 47-48.

51 *Ibid.*, p. 76, p. 90, p. 203.

る「革命前のイランと革命後のイランとの間にはほとんど差を見いだすことはできない」といわれ、「経済の本質的なガイドラインは、イスラム的装飾を持った資本主義、社会主義、ポピュリズム、プラグマティズムの混合である。——外観以外はシャーの時代と本質的に相違しない経済システム——」<sup>52</sup>と評価されている。

#### IV イラン革命のディスコース

##### 1 イスラムと近代化

さて上記に見たようなイラン革命の経緯と結果は、イランの人々がイスラムをどのように捉え、この国に不可避的なものとして迫っている近代化をどのように解決するのかという課題にたいする一つの答えとして出されたものであると考えられよう。イスラムと近代化というテーマは、それ自体が一冊の書物になるほどの大きな課題であるが、ここでは P. J. バチキオティスの見解を紹介しながら他のイスラム諸国が抱えている問題の基本的性格を併せて明確にしておこう。

バチキオティスによれば、アラビア半島で生まれたイスラム教は、神による支配という普遍的な宗教的真理を持っていた一方、この神の名で統一されたアラブ種族が広大な地域を征服するにつれて、「コーランはイスラムにおける政治権威にとっては貧弱な源泉」<sup>53</sup>にならざるをえなかったとみている。つまり現実の政治においては、為政者はイスラム以外の種族主義やビザンチンタイプの専制政治、あるいはオスマントルコの独裁制等の多様な伝統、文化、世俗的な法律を利用せざるをえず、また一般の人々も現実の政治・経済生活にかんしてはそれぞれの慣例、慣習等に依存せざるを

52 *Ibid.*, p. 137, p. 321; M. Moaddel, *op. cit.*, p. 237.

53 P. J. Vatikiotis, *Islam and the State*, Croom Helm, 1987, p. 23.

えなかったといえよう。こうして現実にはコーランやシャリーアはイスラムのすべての期間においておろそかにされ、無視された<sup>54</sup>。イスラムはるか昔に社会や政治的秩序の調停者としての力を失った。宗教的な権威は世俗的な政治権力から切り離され、ただ政治的権威にたいしてコーランをもって祝福し、合法化することによって宗教的権威を維持していることに自ら納得し、それと見返りに与えられた特権的な地位に満足してきた。「これは現実（地上の権力）と理想の間の典型的な中世的妥協であった<sup>55</sup>」と彼は書いている。

ところで上記のような妥協は、世俗的権威の領域と宗教的権威の領域とが重なっているような状況の下では可能であったが、近代において西欧列強によって国境が線引きされて民族国家が形成されると大きな問題を引き起こさざるをえなかった。そもそもムスリムの歴史的経験においては、国家は領土的なものではなく、イデオロギー的なものであったことに注意しなければならない。というのはイスラム教徒でない者は、政府によって国家の市民、臣民としてでなく、異なった共同体のメンバーとして扱われてきたからである。まさに「ムスリム（イスラム教徒）は、世界と人類を導くために神によって代表される者であり、彼等は他の者によって指導されない<sup>56</sup>」、そういう人々であった。そしてこうした宗教的信念をもつ人々が集まった共同体（ウンマ）こそが国家であったといつてよい。パチキオテイスは次のように述べている。「イスラムはすべての権力にとっての合法性の源であった。人間が作った他のすべての制度は二次的な重要性しかなかった<sup>57</sup>」と。イスラム社会では今なおこうした考えが支配的である。そのためこの社会ではキリスト教社会のように「人は未だ神を殺していない」

54 *Ibid.*, p. 39.

55 *Ibid.*, p. 59.

56 *Ibid.*, p. 82.

57 *Ibid.*, p. 52.

といえ、神は個人の内面的なものとして限定されておらず、自然法、市民社会の概念が生まれておらず、欠如しているといえよう。

さてイスラム世界がこうした基本的性格を持っている限り、19世紀以来知識人によって行われてきたナショナリズムをイスラム社会を復興させるために利用しようという努力は大きな成果を挙げることができなかったことが容易に理解できよう。民主主義や自由主義、社会主義等が定着しなかったことも、工業の未発達の下でブルジョアジーやプロレタリアートが未形成のままに留まったという視点と併せて、イスラムとの関わりで理解されねばならない。政府の出版物はまさにこのことを物語っている。「民族主義は非イスラム化の結果として作られた真空を満たすために植民地主義者によって導入された一つのたくらみである」。「現在途上国世界で自由と考えられているものは、神の秩序からの人間の追放であり、物質主義へのかれの奴隷化である。科学の名における西洋の自由は、実際人間が持つ神の性格から動物の性格へ逃避することを宣言するものである<sup>58</sup>」と。

しかし現実には民族国家は、近代的な制度と機能をシャアのイランでも、バアスのイラクやシリアでも、ナセルのエジプトでも拡大させてきた。それはイスラム的宗教制度やその指導者を犠牲にしてきたが、ただバチオティスが重視するのは、同時に世俗的な国家がこの過程において自らの合法性の基礎を確立したわけではなかったということである。近代化が「人が神を殺していない」社会に入りえなかったこと、むしろシャアの時代に代表されるように様々な混乱と災害をもたらしたこと、「この失敗こそが、好戦的なムスリムによって“イスラムの政治に帰れ”という彼等の要求を主張するための証拠として現在掲げられている背景である<sup>59</sup>」。い

58 *Islamic Revolution — Future Path of the Nations —*, The External Liaison Section of the Central Office of JIHD—E—SAZANDEGI, 1982, p. 17, p. 22.

59 P. J. Vitkiotis, *op. cit.*, p. 56.

ずれにせよ原理主義者の求めるところの社会は、宗教的権威と政治的権威とが融合したウンマでしかない。だが原理主義者が主張するウンマは、西アジアの現状を見るかぎり大衆にアピールするものの、過去の理想化でしかなく、過去の現実はい述のように宗教的権威の無視の歴史であったことは既に示したとおりである。

ところでイラン・イスラム政府の出版物は次のように書いている。14世紀も以前の神の規定が「今日や将来の我々の近代的で、常に変化している要求にいかん有効であるのか。その答えはきわめて単純である。イスラムの教えには2種類、永久的なもの（固定されたもの）と変化しうるものがある。変化しない教えは人間の本質に関わるものである」。「変化する教えは人間の必要や人間社会で出くわす種々の問題に従って変わるものである。これらの変化する教えは、イスラムのファキーフ（法学者）によって明らかにされている。つまり、宗教的先例、すなわちコーランやスンナ（慣行）、アクル（根拠）、イジュマー（合意）という基本的なベースに基づき、（問題を解決する…引用者）<sup>60</sup>神学者」によって明示されると。これがイラン・イスラム共和国を最終的に支配した勢力のペラーヤテ・ファキーに関する論理である。

## 2 イスラムとイラン革命

だが実はイスラム思想は多くの派閥に分かれていたことを無視してはならない。たとえばA. ラハネマとF. ノマニは、革命当時のシーア派のイデオロギーを次の4つサブシステムに分類している。

第1の思想は、アヤトラ・モッタハリに代表されるものである。彼は神への信仰や神の意志への個人的かかわりを重視し、社会変化は個人が自ら発展し、その内部に心理的な革命が生じることからのみ起こると捉えた。

60 *Islamic Revolution — Future Path —*, p. 102.

同時に彼は西洋の資本主義と結びついてきたあらゆる法的、政治的、文化的付随物を拒否し、たとえば多数決や人民の支配、基本的な政治的自由、普遍的な参政権を軽蔑した。モッタハリにとってはイスラム法の実施を通して全体の幸福を実現することが究極の目標であり、自由を制限することは許されうるものと考えられていた。その意味で彼は「究極的な意志決定者としての聖職者が存在するイスラム社会を描いていた」とみなされている。このように彼の思想は神を個人とのかかわりでとらえるという点で社会制度については曖昧であり、私的財産制度に基礎づけられた市場システムに対しては反対しておらず、親資本主義的性格をもつものであるとも指摘されている。<sup>61</sup>

第2の思想はマルクス主義の影響を受けたアリ・シャリアティに代表されよう。彼は資本主義を拒否するとともに革命的イスラムを主張し、「このシステムは資本主義と共産主義という2つの腐敗したシステムの間の中間の地位を占める」と述べているが、他方で「イスラムの社会・経済システムは、それが神への信仰に基づいていることを除けば科学的社会主義と同じである」とも述べ、<sup>62</sup>さらに労働力、剰余労働、搾取などの階級的用語を使用して、労働者や農民を中心とする「収奪された者」にたいする正義とその地位の改善を求めた。

しかもシャリアティはイスラム革命と革命的イスラムとの間に明確な線を引いて区別し、聖職者に対してきわめて批判的であった。彼は「何世紀にもわたり自らの義務を怠り、学際的である科学を(イスラム)法学の分野にきわめて矮小化したウラマーは、大衆を誤って導き、彼らの真の信念を無視したままにしている」<sup>63</sup>と考えた。したがってウラマーへの権力の集

61 A. Rahnema & F. Nomani, *op. cit.*, p. 48, p. 51.

62 *Ibid.*, p. 54.

63 M. B. Philipp, *Tradition and Change in Iranian Socio-Religious Thought, Modern Iran*, p. 55.



中は、『宗教、聖職者の専制主義』が出現するための必要・十分条件を作り出す<sup>64</sup>』とも論じており、ベラーヤテ・ファキーを主張したホメイニとは異なった思想を展開させた。そのためモッタハリ等は、彼の考えをイスラム的なものとは考えず、イスラムを政治的、社会的目的のための手段として利用している道具主義者として非難した。ホメイニもまた彼を嫌ったが、シャリアティが人々から「社会問題を意識し、イスラムという文化的に慣れ親しんだ武器をもって社会を変える準備がある」<sup>65</sup>人物として評価されたため、また革命段階においては彼の考えを吸収し、統合し、利用する方が有利であると判断したため当面は放置したが、その後は彼の思想をシーア派でなくスンニー派であり、マルクス主義であると非難して抑圧した。

第3のサブシステムは、フェダイン・イスラムを組織したナジャフ・サファビの思想が挙げられている。彼はイスラムの敵に対しては革命的なテロ活動のみが救済への正しい道であると主張した。というのは現在の社会的不幸や墮落、あるいは悪はイスラムの教義にその行動が基礎づけされていないことから生じているのであり、したがってこのような非イスラム的な実践を永続化させている個人を社会から排除することは正当であり、宗教的義務になると考えたからである。こうした考えは伝統的な農村から追い出され、都市で不安定な生活を強いられ諸階級の熱望と不満を明確に表現したものと評価されている。ただ問題はサファビの考えは、他のイスラム思想が変化する社会にたいしていかに自らの宗教を適応させていくのかという課題を認識していたのに対して、変化を押しとどめ、社会を閉じられた前資本主義的な過去に戻すことにしか関心がなかったということであろう。彼自身は1956年に死刑にされているが、その考え方はイスラム共和国の指導者に受け継がれており、たとえばホメイニによって共和国の初

64 A. Rahnama & F. Nomani, *op. cit.*, p. 62.

65 *Ibid.*, p. 54.

代検察長官として任命された S. ハハリは、原理主義の考えに賛成しない者をイスラムの義務を守らない者として死刑に処すことに躊躇はなかったし、ラジャイ首相も「サファビの古い目的を復活させた」と見られている。いずれにせよホメイニの思想はこのサブシステムにきわめて近いものであったといえよう。<sup>66</sup>

第4の思想は、バザルガンに代表される流れである。彼はシャーの打倒においてはホメイニと協力したが、そもそも彼にとってはイスラムは個人に任された私的な、内面的な問題であり、神と人間との関係は自由に基づいているものとして捉えられた。しかも彼の思想においては、イスラム法の実施はもしこれが自由や民主主義を犠牲にするならば、容易に捨て去られるべきものであったことに注意しなければならない。というのはイスラムは自由や民主主義を保証しているものと考えられ、人民の政治への参加は議論の余地がなかったからである。つまり彼にとっては宗教は、近代西欧の中でキリスト教が位置づけられていたのと同じ位置にあり、個人の内面では重要であったものの、こと社会に関する限り彼にとっては制度の方が重要視されていたことを意味する。この意味でラハネマとノマニは、バザルガンが主導した政府は「プロレタリアートの独裁によって直ちに引き継がれねばならなかった革命のブルジョア的民主主義段階を代表した」<sup>67</sup>と捉えていることは興味深い。

さて以上4つのサブシステムは、一応このように分類できるということであり、どのサブシステムも神の秩序を現世において確立することを求め、イスラム法・シャリーアが彼等にとって守るべき重要な原則であったことは否定されてはいない。それぞれのサブシステムは、イスラムそのものがその解釈をめぐって様々なバリエーションを生み出すような可能性を

---

66 *Ibid.*, pp. 92-93.

67 *Ibid.*, pp. 103-112.

持っていることから生じたものであるととらえられよう。したがって、財産所有者も、労働者や農民も自己に都合の良いような解釈をイスラムから取り出すことができた。こうして「個々のサブシステムは一つの社会グループを代表するようになった」<sup>68</sup>。イスラムのディスコースは、こうした曖昧さを秘めて、すべてのサブシステムを包括したため、既に述べたように革命過程の中で主導的な力になったと考えられる。逆に言えばそれは様々な人々の利害がブルジョアジー、プロレタリアート等として十分に形成されておらず、またそれ故それぞれのサブシステム、勢力が国家を掌握できるような力を未だ獲得していないことを意味していたととらえられよう。

ところで革命的危機は、イランが抱えてきた社会的不満がシーア派の革命的ディスコースによって表現されたとき始まった。既述のように1978年のコム的事件は、まさに革命の起爆剤になった。この事件における死者に対してイスラムは、死後40日目の追悼儀式に合わせてデモンストレーションを組織化した。そしてこのデモに対する政府の抑圧は一層多くの死傷者を引き起こし、更に新たな儀式とデモをもたらした。78年1月9日、2月18日、3月29日、5月8,9日へと40日毎に展開していくシーア派のディスコースは、イスラム歴における聖なる月におけるモスクでの祈りと扇動とともに「抵抗活動に入るための正確な日と理由を設定し、自動的に国家に対する人々の動員に貢献した」<sup>69</sup>。つまり「革命は権力を求める競争、階級闘争のダイナミックな動きによって作られただけでなく、革命的イデオロギーのダイナミックによって形作られた歴史的行動の様式である」<sup>70</sup>ことを指摘しておかなければならない。したがってまたこの過程で起こったサブシステム間の闘争は、十分に国家権力を握ることができなかつ

---

68 *Ibid.*, p. 27.

69 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 160.

70 *Ibid.*, p. 266.

た未成熟な階級の利害が、イスラムという大きな枠の中でひつついたり、離れたたりしながら闘争したというように考えられよう。

ホメイニを中心とする原理主義者の勝利は、上記のような革命的ダイナミックな運動とイラクとの戦争という異常事態の中で、他のイスラムのサブシステムを犠牲にして展開されたものにすぎない。その意味でかれらの勝利は理論上、思想上の勝利ではなく、イスラムの歴史においてこれまで見られた権力闘争と同じように世俗的なレベルものにすぎなかった。実際イラクとの戦争は聖職者の関心のほとんどを引きつけ、「経済条件はその成り行きに任され、主にリップサービスのみが払われたにすぎない<sup>71</sup>」。そして結局この過程は政治面では原理主義者による他のすべての勢力、思想、文化に対する抑圧をもたらし、経済面ではシャーの時代のような弱肉強食の原則が支配する状態が再現することに終わった。原理主義者がいかに世俗的であったかは、イラクとの戦争において彼等が「悪魔である」と決め付けたアメリカやイスラエルから兵器を調達することに躊躇しなかったことから明らかであろう。「神の大儀のため、死は最大の報酬である」として戦争に参加した兵士や国民は、イランゲート事件の暴露の中でショックを受け、混乱した。「彼等の堅固な信念は取り返しがつかないほど損傷を受けた<sup>72</sup>」といわれている。こうしてそれは表面化するか、しないかにかかわらずウンマ内部に紛争の種を蒔いたものと考えられよう。イスラム原理主義は過去の歴史と同じように「権力と国家の統制をめぐるきわめて世俗的な闘争<sup>73</sup>」以外の形態をとれないところにその限界をもっている。「革命の終了をもってイスラム的ディスコースは権力のイデオロギーになった」とか、「イスラムはもはや社会を組織する最も重要な原則ではなく

71 M. Kadhim, *op. cit.*, p. 51.

72 A. Rahnama & F. Nomani, *op. cit.*, pp. 354-355.

73 P. J. Vatikiotis, *op. cit.*, p. 34.

なった」<sup>74</sup>とかと指摘されるゆえんである。

### む す び に

ではイラン・イスラム革命とはどのようなものであったのであろうか。F. ハリデーは次のように述べている。それはまさしく政治革命であり、大衆は確かに支配階級の一部から他の部分へ政治権力を暴力的に移行させた。しかも彼は実際にシャーを打倒し、ホメイニに権力を与えたのは「大衆デモのレベルではなく、特に油田地帯の工場のストライキという、第1に経済的で、さらに直接的な政治的事件であった」ととらえている。だがハリデーは同時にこの期間、運動を支配したのは結局ホメイニのイデオロギーであるにとらえ、それは「イスラム革命」と一般に呼ばれているものの、用語そのものは聖職者の強力な支配を隠し、「反対運動の階級的複合性を隠匿するイデオロギー的仮面に使われた」にすぎないとみて、イランではいかなる革命も行われなかったと規定している。つまり「『イスラム革命』の論理は、潜在する階級の継続性を秘匿している」<sup>75</sup>と。

さて労働者階級が革命において果たした役割をハリデーのように大きく評価できるかどうかは明確ではないが、イラン革命は彼が認めているように都市労働者、知識人、中産自由職業人、学生、伝統的な小ブルジョアジー（バザールの商人）等広範な階級・階層を含むものであった。そして革命はまさにホメイニ政権という「時代錯誤的な政権の出現を導いた」。その直接的な階級基盤は、もちろん労働者でも資本家のそれでもなかった。このことが「イラン革命は『中産階級の革命』として定義されうる」<sup>76</sup>とい

74 M. Moaddel, *op. cit.*, p. 257.

75 フレッド・ハリデー、若永他訳『イラン—独裁と経済発展—』、法政大学出版会、1980年、332-333ページ、335ページ。

76 H. Amirahmadi, *op. cit.*, p. 2.

われたり、あるいは「農民の協同組合や労働者会議の抑圧は、小ブルジョアジーへの革命評議会の傾斜を示している。小ブルジョアジーは国家の援助と古い政権から生き残ったブルジョアジーとを取り込んでイランにおける新しいブルジョア支配階級へと展開しつつある<sup>77</sup>」といわれたりするゆえんである。確かにそこに現れてきたものは、新たに出現しつつあるブルジョアジーの利害の反映であったことをもう一度再確認しておくことが必要となろう。ただこのブルジョアジーは、先進資本主義国に見られるような普通選挙による議会政治、三権分立に基づいた政治支配を行うことはできなかったし、また政治、宗教、教育、文化等を丸抱えにして国民にヘゲモニーを行使したわけでは決してない。イラン・イスラム革命は未成熟なブルジョアジー、あるいは小ブルジョアジーの経済的勝利で終わった革命であり、政治的にはイスラムのイデオロギーという前資本主義の政治が勝利した革命であったといえよう。<sup>78</sup>

(本稿は人文科学研究所第9研究における専従研究の成果です)

---

77 M. Parvin & M. Taghavi, *op. cit.*, p. 176.

78 イラン革命をどう見るかについては鈴木氏が、1) 社会構造・階級・都市化の視点、2) イデオロギー・指導者・政治文化視点、3) マイノリティ・ジェンダー視点、4) 国際関係視点から文献的考察をされ、その総合化の重要性を指摘されている。本稿ではとてもできなかったが、今後の課題となろう。鈴木均「革命イランをめぐる政治分析の再検討」『中東における国家と権力構造』伊能武次編、アジア経済研究双書、1994年、第3章参照。